# 『虹』の結末の新解釈
## ―虹と蛇の表象を中心に―

田部井　世志子

**キーワード**

『虹』、「炭素の手紙」、虹、蛇、龍、虹蛇

**要旨**

『虹』の結末において主人公のアーシュラが希望の虹を見るという設定に関しては、Ｆ・Ｒ・リーヴィスが「唐突で裏づけのない」ものであると批判的に捉えて以来、多くの批評家がそれに同調してきた。本稿の目的は、その結末の虹に新たな解釈をつけ加え、その虹の登場の必然性を提示することにより、必ずしも結末はリーヴィス等の主張するように唐突なものではないということ、そしてまた、物語全体はむしろイメージ的に有機的な統一が図られており、結末へと向かうための前兆、筋書きは巧みに仕組まれているということを論証することにある。

その目的を達成するために、まず第１章では、本論を進めるにあたって大前提となる議論――ロレンスが本作品において描こうとした人間の「炭素」とは、大自然も内包する人間の内なる「生命力」あるいは「潜勢力」のことであり、人物や大自然の描写にあたっては、それが蛇（龍）のイメージで描かれているということ――を提示し、第２章では、その前提を踏まえた上で、物語の３つの世代において登場する虹、あるいは虹と関連するアーチなどの表象が、それぞれの世代でどのような役割を果たしているのかを検討した。そして、最終章においては、ロレンスも知っていたと考えられる「虹蛇」の概念を持ち出し、物語の結末の虹を、川をはじめとした大自然の生命力（龍、大蛇）の天がけたものと捉えることで、新たな視点で解釈した。

### はじめに

Ｄ・Ｈ・ロレンスの小説は、結末が曖昧なものが多く、批評家たちの間でも物議を醸すケースが多い。[1]　代表作の一つ『虹』（*The Rainbow*）についても、Ｆ・Ｒ・リーヴィス（Leavis）は「完璧な芸術作品ではない」が「この小説はまさしく、そして紛れもなく大作家の重要な作品である」（115）と思えると一定の評価を与えつつも、同時に物語の結末の一節に「不完全さ」を見ている。

There is something oddly desperate about that closing page and a half: the

> convalescent Ursula's horrified vision, from her windows, of the industrial world outside, and then that confident note of prophetic hope in the final paragraph—a note wholly unprepared and unsupported, defying the preceding pages [...]. (170)

このようにリーヴィスは、結末部分を「それに先立つ部分を無視した、全く唐突で裏づけのない」内容になってしまっていると批判する。甲斐貞信氏は「この意見に同調する批評家も数多い」(31) として、「この本の中の何一つとして最後の虹のヴィジョンへと繋がるものはない」(71) と断言したG・ハフ（Hough）をはじめ、J・モイナハン（Moynahan)、D・デイシス、T・スレイド、P・K・ギャレイ、K・オルドリット、R・セイルなどを挙げている（*cf.* 39)。[2]

『虹』のeBook を利用して“rainbow”という言葉を検索すると 9 回登場していることが分かる。その中の 5 箇所が、物語の結末でアーシュラが見る虹の描写の場面に含まれている。物語の中で最も強烈で印象に残る重要な虹の登場場面を以下に引用してみよう。体調を崩した彼女が、「恐るべき崩壊の様相が地表を覆い尽くしている」様（さま）に吐き気をもよおしながら、窓の外を眺めている場面である。“rainbow”だけでなく、“arch”“arc”“bow”“iris”“iridescence”といった虹に関連する用語が目白押しである。

> And then, in the blowing clouds, she saw a band of faint iridescence colouring in faint colours a portion of the hill. And forgetting, startled, she looked for the hovering colour and saw a rainbow forming itself. In one place it gleamed fiercely, and, her heart anguished with hope, she sought the shadow of iris where the bow should be. Steadily the colour gathered, mysteriously, from nowhere, it took presence upon itself, there was a faint, vast rainbow. The arc bended and strengthened itself till it arched indomitable, making great architecture of light and colour and the space of heaven, its pedestals luminous in the corruption of new houses on the low hill, its arch the top of heaven.
>
> And the rainbow stood on the earth. She knew that the sordid people who crept hard-scaled and separate on the face of the world's corruption were living still, that the rainbow was arched in their blood and would quiver to life in their spirit, that they would cast off their horny covering of disintegration, that new, clean, naked bodies would issue to a new germination, to a new growth, rising to the light and the wind and the clean rain of heaven. She saw in the rainbow the earth's new architecture, the old, brittle corruption of houses and factories swept away, the world

> built up in a living fabric of Truth, fitting to the over-arching heaven.（*The Rainbow* 495-96、以下、*R* と略す）

この結末をリーヴィスは、何の脈略もなく「唐突で裏づけのない」ものだという。『恋する女たち』の重要なテーマ――「産業文明下の人間生活についての危機感」――は『虹』でも後半部分で扱っているが、まだこの段階においてはロレンスには「扱い切れない」ものであり、彼は「ともかくもこの作品を終わらせ、けりをつけてしまいたかった」ために、唐突にも「希望の調べ」で無理やり終わらせてしまったのだという（*cf.* 169-70）。果たしてリーヴィスのいう通りなのだろうか。ハフの主張するように、この虹を予感させるものは全くないのだろうか。

また、アーシュラが見る結末のこの虹について、聖書の「創世記」9 章において、神が大洪水を引き起こした後、空に契約の虹を架け、「ノアとその家族を祝福すること」（祝福）と「二度と洪水で地上の生き物を滅ぼさない」（護り）ことを約束したことに因み、「黙示録的な虹が『生』と『死』とを越えた『復活』の象徴として」（10）立ち現れたものと見る甲斐氏をはじめ、そこに希望を読み取る批評家が多い。[3] しかしこの点についても疑問は残る。「創世記」のノアの方舟と虹による神の契約の一節は、もともと聖書の中でもアーシュラの特にお気に入りだったが、スクレベンスキーとの「神々しい月」（*R* 324）の下での逢瀬の経験後は、「神のことなど、もはや気にする必要はない。今こそ自由なのだと彼女は思った」というように確実に神に対する彼女の思いが弱まっている。

> What was God, after all? If maggots in a dead dog be but God kissing carrion, what then is not God? She was surfeited of this God. She was weary of the Ursula Brangwen who felt troubled about God. Whatever God was, He was, and there was no need for her to trouble Him. She felt she had now all licence.（*R* 325）

このように葛藤を繰り返しつつ、神に対してある意味「うんざり」し、神からの自由を求めている（*cf. R* 325）アーシュラが、とりわけ契約の印である虹が登場するノアの方舟に関する箇所に関しても、徐々に不審の念を抱くようになっていく彼女が、自らの批判の対象である「神」が創った虹に対して従来のキリスト教的な意味での希望や啓示を見、神の恩寵を文字通り受け入れていると単純にいい切って良いものだろうか。物語を精読した読者にとっては、必ずしも直截的には頷けない違和感が残ることだろう。

リーヴィスの批判以来、様々な議論を呼んだ『虹』の結末解釈であるが、本稿ではアーシュラが結末で見る虹はもちろん、それ以外の虹にも焦点を当てつつ、同時に虹という概念を広げ、虹と関連するアーチなどの表象にも検討を加える[4]ことで、3 つの世代の在り方とその変化に目を向けた

い。そうすることで、物語の結末に新たな解釈を試みると同時に、その虹の登場の必然性を提示し、リーヴィスやハフの主張に対して否を唱えることができればと思う。

そのためにまず第１章では、本論を進めるにあたって大前提となる議論――ロレンスが本作品において描こうとした「炭素」とは一体何で、それがどのように描かれているのか――を提示したい。第２章では、その前提を踏まえた上で、物語の３つの世代において登場する虹、あるいは虹と関連する表象がどのような役割を果たしているのかを検討しよう。そして、最終章において、物語の結末を新たな視点で解釈してみることにする。

## 第１章　前提としての議論

本論第２章以降で『虹』の結末解釈をするにあたり、本章では前提として必要な議論をまず提示しておきたい。以下は拙論「『虹』における蛇のイメージ」の要約である。適宜、内容を補強したことを断っておきたい。

ロレンスはいわゆる「炭素の手紙」（1914年６月５日付、Ｅ・ガーネット宛）の中で、『虹』を書くにあたって「一定の道徳体系の枠の中で捉える」ことのできるような因襲的人物描写はやめ、「同一で単一の本質的に不変の要素」を作品に描こうとしたと言明し、自分自身の「テーマは炭素なのだ」と高らかに宣言した。その「炭素」は具体的にどのように描かれているのだろう。また、その「炭素」とは一体何なのだろうか。

『虹』を一読すれば、作品全体を通じて登場人物たちが馬、狼、虎、狐、鷲、鷹、モグラ、あるいはどんぐりといった様々な動植物のイメージで描写されていることに気づく。中でも蛇のイメージはほとんどの人物たちの容貌や振る舞いに多かれ少なかれ付加されている。「蛇のように」といった直接的な表現だけでなく、蛇の属性を想起させる「まぶたを閉じない」（*R* 80）光輝く目の描写、他にも “hiss” “coil” “bite” といった蛇の存在を感じさせるような表現が目白押しである。またカップルたちの抱擁シーンについても、やはり蛇の交尾を想起させる箇所が散見できる。[5]　物語の舞台が「マーシュ・ファーム」と、蛇の巣を連想させる地を中心に繰り広げられているのも、故なしというわけではないだろう。

では蛇の比喩で人間を描写することで、ロレンスは何を伝えたかったのか。蛇は一体何を象徴しているのだろうか。簡潔にいえば、それは一つには「蛇」の詩に見られるような非人間的「生命力」だといえるだろう。[6]　また、ロレンスは蛇の表象だけでなく、龍の表象をも取り込むことで、それらを、我々の内に潜み「蛇の如く敏捷であり、唐突であって、また龍の如く威圧的」な「行為の遂行者」、「人間の全身全霊を貫いて波打つ流動的・電撃的で、しかも打ち勝ち難く、透視力すらもつ潜勢力」（*Apocalypse* 90、91、以下 *A* と略す）[7] と表現するようになる。このように、内側から鼓舞し行為を促すような「生命力」あるいは「潜勢力」が、人間の意図にかかわらず人間には具わっ

ているとロレンスは考えており、しかもその不変の根本的要素を蛇（龍）のイメージで捉えているのである。もっともロレンスは龍に関してはもともと大自然に存在するものであるとし、とりわけ「宇宙の龍」(“the Cosmic Dragon”) (“Hopi Snake Dance” 82、see also 84) の概念で用いており、蛇についてはその「非人間的な」大自然における「潜勢力」を表わしつつも、特に地球（大地）の深みからそのメッセージを運ぶ伝達者として用いることが多い。それはキリスト教におけるエデンの園の蛇、人間に知恵の木の実を食べさせた邪悪な伝達者としての蛇というよりは、オーファイト（拝蛇教）における知の伝達者に近く、S・ギルバート（Gilbert）の言葉を借りれば「秘義の知の伝達者」(173) といえるだろう。

実際、本作品においても、物語の中の川や海、雨、暗闇、月といった自然（物）に蛇や龍のイメージが付加されており、大自然のそういった蛇や龍が登場人物たちを鼓舞するがごとく影響を与えていることも忘れてはならない。具体的には、アーシュラに何度も影響を与える、蛇の目のような月をはじめ様々あるが、以下にロレンスの技巧の妙が発揮されている一つの例を挙げてみよう。アナとウィルが小麦の束を運ぶ場面である。声を出して読んでみると蛇の存在が感じ取れないだろうか。

> There was only the moving to and fro in the moonlight, engrossed, the swinging in the silence, that was marked only by the splash of sheaves, and silence, and a splash of sheaves. And ever the splash of his sheaves broke swifter, beating up to hers, and ever the splash of her sheaves recurred monotonously, unchanging, and ever the splash of his sheaves beat nearer. (*R* 123-24)

[s] 音と [ʃ] 音の繰り返しが著しく、まるで蛇がシューシューと音をたてながらあたりを這い回っているような印象を与えている。リズミカルな蛇の動きとその存在を髣髴とさせる効果を醸し出す技巧については、ハフが “Snake” の詩を論じる際に触れていた (*cf.* 207) ことを指摘しておきたい。アナとウィルは最初、自由意志で束を運んでいたが、月（蛇の目）に見つめられつつ、蛇の存在を感じ取れる暗闇の中で、未知なる力によって次第にリズミカルになり、二人はついに一つになっていくのであった。

このように論じてくると、ロレンスにとって人間存在そのものの根幹ともいうべき「炭素」とはまさに「生命力」であり「潜勢力」であるといえるだろう。また、その「炭素」が大自然の「潜勢力」の影響を受けつつ、いかに人間を内側から突き動かしているかを描こうとしたロレンスの意図は、『虹』において蛇（龍）を中心とした比喩やイメージの駆使により、重層的、総合的、かつ卓越した詩的象徴描写によって実に巧妙に遂げられているのである。以上が拙論「『虹』における蛇

のイメージ」の中で論じた内容である。

## 第２章　３世代における虹的表象と各世代の存在様式

前章の内容を念頭に置いた上で、以下、３世代における虹や、アーチなどの虹と関連した表象にも着目し、それらが世代毎にどのように現れているのかを検討し、更にその違いの理由にまで考察の枠を広げてみよう。

まず第１世代のトムとリディアを見ていこう。第１世代に虹は一切出ていないと読者はいうかもしれない。確かに“rainbow”という語そのものは一度も用いられてはいない。しかし、虹に関連する語“arch”は用いられている。そこで、その場面に行き着くまでの第１世代の在り方を追ってみよう。農耕牧畜中心の生活をする中、男女はそれぞれ相手にとって「未知なるもの」として対峙している。「天と地の交わりを知り」（*R* 8）、大自然との交感を良しとする男と、それには飽き足りず、知を求めようとする女という対比である。男たちの様子を以下に記してみよう。

> It was enough for the men, that the earth heaved and opened its furrows to them, that the wind blew to dry the wet wheat, and set the young ears of corn wheeling freshly round about [...]. So much warmth and generating and pain and death did they know in their blood, earth and sky and beast and green plants, so much exchange and interchange they had with these, that they lived full and surcharged, their senses full fed, their faces always turned to the heat of the blood, staring into the sun, dazed with looking towards the source of generation, unable to turn round. (8-9)

このように大自然の中にあって、「血の交歓」（“blood-intimacy”）（8）を通じて生の充足を感じる男たちである。一方、女たちはどうだろうか。

> But the woman wanted another form of life than this, something that was not blood-intimacy. [...] She stood to see the far-off world of cities and governments and the active scope of man, the magic land to her, where secrets were made known and desires fulfilled. (9)

「秘密が明かされ、様々な欲望が満たされる」世界を求める女たちは、その追求が止むことはない。また、かなたの「声ある世界」（“the spoken world”）（8）を常に見つめ、「より高い生活の在り方」を求めるために、女たちは「知」を、教育を求めるようになるのだった（*cf.* 10）。蛇によってイ

ヴが喚起された「知」の追求への好奇心、その知はかくして神秘的なものから言葉と分析によって理解できる知へと変化してきたのだ。

このような変化に関して、ロレンスが『黙示録』（*Apocalypse*）の中で興味深い解説をしているので、以下見ていこう。もともと人間の内には蛇や龍の象徴する「生命力」や「潜勢力」が存在しているとロレンスが考えていたことは、すでに第１章で見てきた通りである。その龍（蛇）を「意識」や「ロゴス」[8]との関連で次のように説明している。

> The dragon is one of the oldest symbols of the human consciousness. The dragon and serpent symbol goes so deep in every human consciousness, that a rustle in the grass can startle the toughest ‘modern’ to depths he has no control over.
>
> First and foremost, the dragon is the symbol of the fluid, rapid, startling movement of life within us. That startled life which runs through us like a serpent, or coils within us potent and waiting, like a serpent, this is the dragon. And the same with the cosmos.
>
> From earliest times, man has been aware of a ‘power’ or potency within him – and also outside him – which he has no ultimate control over. It is a fluid, rippling potency which can lie quite dormant, sleeping, and yet be ready to leap out unexpectedly.（*A* 90）

ギリシア人たちが「神」と呼んだであろう人間の内なる「潜勢力」、人間の意識下に潜む、人間自らがコントロール不可能な力、それがロレンスの想像力では蛇（龍）なのであった。その蛇（龍）はまた、神のロゴスでもあるとロレンスはいう。神との直接的な交歓によって得ていたそのロゴスが、キリストによって言語化されてしまった「ロゴス」へと変化をしたと同時に、その蛇（龍）も次のように変化をしてきたとロレンスはいう。

> And the Logos, the good dragon of the beginning of the cycle, is now the evil dragon of today.（*R* 93）

かくして神秘的な「潜勢力」でもあった「神の言葉」ロゴスが、今や我々のことごとくを死に至らしめる「ラオコーンにとっての邪悪な蛇」あるいは「牙を向ける多数の灰色の力なき小蛇」になってしまっているというのだ。

> So the Logos came, at the beginning of our era, to give men another sort of

splendor. And that same Logos today is the evil snake of the Laocoön which is the death of all of us. The Logos which was like the great green breath of spring-time is now the grey stinging of myriads of deadening little serpents.（*A* 94）

また、「大いなる緑の龍」が変化した姿として「赤い龍」と共に「小さなマムシ」という表現もある点を次に指摘しておきたい。

But alas, the great green dragon of the stars at their brightest is coiled up tight and silent today, in a long winter sleep. Only the red dragon sometimes shows his head, and the millions of little vipers.（*A* 92-93）

このようにして「我々の時代の始め」に別の新しい光輝を人間に与えんとしてやってきたロゴスは、「今日では」悪しき蛇へと変化を余儀なくされているという。春の大いなる緑の息吹の如きロゴスが、やがては人を殺す無数の「灰色の小蛇」のように毒牙で我々を噛むようになった。かくして緑龍の「灰色の小蛇」への変化に伴い、人間の内なる生の衝動も弱まってきたのである。

『黙示録』での論の展開を待たずとも、ロレンスは「民主主義」（“Democracy”）の中でも同様の議論を展開している。「生き生きとした生命宇宙」と言葉によって生み出された観念の世界を念頭に置き、後者のような世界で人間を「抽象的、機能的、そして機械的な単位」にしているのは人間が口にして作り出した「ロゴス」だとロレンスはいう。

This is how the ideal world is created. It is invented exactly as man invents machinery. First there is an idea; then the idea is substantiated, the inventor fabricates his machine; and then he proceeds to worship his fabrication, and himself as mouthpiece of the Logos. This is how the world, the universe, was invented from the Logos: exactly as man has invented machinery and the whole ideal of humanity. The vital universe was never created from any Logos; but the ideal universe of man was certainly so invented. Man's overweening mind uttered the Word, and the Word was God. So that the world exists today as a flesh-and-blood-and-iron substantiation of this uttered world. This is all the trouble: that the invented ideal world of man is superimposed upon living men and women, and men and women are thus turned into abstracted, functioning, mechanical units.（*Phoenix* 704-05、以下 *P* と略す）

本来生命力溢れた生命体であるべき人間が、いわゆる「灰色の小蛇」が象徴するような「ロゴス」に取りつかれると「抽象的で、機能的、そして機械的」になってしまい、生命力を欠くことになるというのである。

ロレンスによると、女の方がその「ロゴス」に巻かれやすいという。

> And no one is coiled more bitterly in the folds of the old Logos than woman. It is always so. What was a breath of inspiration becomes in the end a fixed and evil *form*, which coils in round like mummy clothes. And then woman is more tightly coiled even than man. Today, the best part of womanhood is wrapped tight and tense in the folds of the Logos, she is bodiless, abstract, and driven by a self-determination terrible to behold. A strange 'spiritual' creature is woman today, driven on and on by the evil demon of the old Logos, never for a moment allowed to escape and be herself. The evil Logos says she must be 'significant', she must 'make something worth while' of her life. So on and on she goes, making something worth while, piling up the evil forms of our civilization higher and higher, and never for a second escaping to be wrapped in the brilliant fluid folds of the new green dragon. (*A* 94-95)

そして女はその「灰色の小蛇」に苦しみながらも、一見「最善のもの」に見えるものの実際は「邪悪の最たるもの」に過ぎないものを、ただひたすら求めるようになってしまったという。

> So, tragic and tortured by all the grey little snakes of modern shame and pain, she struggles on, fighting for "the best", which is, alas, the evil best. (*A* 95)

ロレンスは、『虹』においてすでに上記のような男女観を反映させている。ブラングウェン家の女たちが「ロゴス」に捕らわれんとしており、トムはその母親の影響を受けつつも、「血の交歓」の内に留まることを良しとし、直感的な生命世界の中で生きていたのである。それゆえ、リディアとの邂逅場面において、彼の「あの非人間的な要素」は彼女のことを自分のパートナであると直感的に見抜き、「ああ、あの女だ！」(*R* 29) という本能的な言葉になったのである。このようにトムは本質的に理性的なものの支配を免れた言葉のない世界に生きている。またリディアも、「考えることなく得た知識」("unthinking knowledge") を持ち、「強力な感覚の信仰の中に生きて」おり、やはり神秘的世界の住人なのである (*R* 104)。このように、最終的に二人は「ロゴス」の世界に絡め取られることなく、言葉ではなく本能で、また「触れ合い」でお互いに「知る」神秘的な世界へ

と誘(いざな)われていくのだった。

ここで、虹の表象に戻ることにしよう。二人の関係においては、虹そのものは出てこないが、虹を髣髴とさせる“arch”が用いられている。まずは妊娠中のリディアがトムに関心を示さなくなってしまった時の彼の様子が次のように語られる。

> He sat with every nerve, every vein, every fibre of muscle in his body stretched on a tension. He felt like a broken arch thrust sickeningly out from support. For her response was gone, he thrust at nothing. And he remained himself, he saved himself from crashing down into nothingness, from being squandered into fragments, by sheer tension, sheer backward resistance. (*R* 65)

このように、妊娠中のリディアがトムに「ますますかまいつけなくなり、いよいよ無関心に」なり、自己の存在そのものまで抹殺されてしまったかのように感じる彼 (64) が、「まるで支柱がはずれて、壊れたアーチのような重い気持ちだった」と「壊れたアーチ」のイメージで描写されている。しかし、やがて彼はリディアと共に「呼べば応える」といった神秘的な調和関係に到達する。

> They did not think of each other – why should they? Only when she touched him, he knew her instantly, that she was with him, near him, that she was the gateway and the way out, that she was beyond, and that he was travelling in her through the beyond. Whither?—What does it matter? He responded always. When she called, he answered, when he asked, her response came at once, or at length. (*R* 96)

かくして二人は頭で「理解することなく」お互いを知り、お互いを必要とする関係を築くことができたのである。更に、次の引用に見られる通り、二人は共に一つのアーチを築くことになる。そのアーチの元で安らぐ娘アナの描写を見てみよう。

> Anna's soul was put at peace between them. She looked from one to the other, and she saw them established to her safety, and she was free. She played between the pillar of fire and the pillar of cloud in confidence, having the assurance on her right hand and the assurance on her left. She was no longer called upon to uphold with her childish might the broken end of the arch. Her father and her mother now met to the span of the heavens, and she, the child, was free to play in the space

beneath, between.（*R* 97）

このように見てくると、アーチとは男女関係が成就した「勝利の象徴」であるといえるだろう。男女が一つになりアーチを築くという発想をロレンスは、後に「虹」（“Rainbow”）という詩の中で明示することになる。以下に引用してみよう。

> One thing that is bow-legged / and can't put its feet together / is the rainbow.[...] / What I see / when I look at the rainbow / is one foot in the lap of a woman / and one in the loins of a man. [...] / The two feet of the rainbow / want to put themselves together. / But they can't, or there'd be the vicious circle. / So they leap up like a fountain. [...] / Because one foot is the heart of a man / and the other is the heart of a woman. / And these two, as you know, / never meet. / Save they leap / high-- / oh hearts, leap high! / --they touch in mid-heaven like an acrobat / and make a rainbow.（*The Complete Poems* 818-20、以下*CP*と略す）

この詩の中でロレンスは、虹を男女が中空で出会い形成したものであると明確に謳っており、先に引用したトムとリディア両人が自ら築いたアーチはまさに二人で作った一種の虹であるといえるだろう。[9]　二人のアーチが彩色されていない理由、虹にはなり切っていない理由については第 3 章で考察を加えることにし、ここではお互いに「未知の存在」であり「正反対の極」を維持する二人が、自らでアーチを築いた（*cf.* Howe 40）という点を強調しておきたい。それは「ヘネフにて」（“Bei Hennef”）の「呼べば応える」（*cf. CP* 203）という男女の成就の世界であるといえるだろう。

「灰色の小蛇」はトムの母親にすでに影響を投げかけていたが、蛇のイメージで十分に描かれる第 1 世代の二人は、その生命力を見失うことなく、理性的、表層的な理解を求めることなく、触れ合いを通してお互いに相手を官能的に知り、関係を成就し、遂に大空に自分たち自らでアーチを築くことができたのだった。

第 2 世代のウィルとアナの関係においては、虹やアーチに喩えられるものが多々存在する。まずは両者の関係を追っていこう。二人の関係においては常に闘いや葛藤が繰り広げられ、勝ち負けが発生している。それは当時のフリーダとの闘いがいかに激しかったかを表している、と鎌田明子氏がロレンス自身の人生と絡めた興味深い指摘をしているが（*cf.* 74）、本稿ではこの点には深く立ち入らない。

第 1 世代との違いとしてまず指摘すべきは、「ラオコーンにとっての邪悪な蛇」と化した「ロゴス」の介入がより強化されている点である。因みにアナは蛇やとりわけマムシにも喩えられることがあ

り（*cf. R* 67）、それはすでに見てきた通り、かつての緑龍が抽象的な「ロゴス」を取り入れたことにより邪悪な存在になった姿でもあった。まさに彼女の内なる蛇は「灰色の小蛇」に変化しつつあることが分かる。彼女は抽象的な知識「ロゴス」に確実に巻かれ始めている。

> She, almost against herself, clung to the worship of the human knowledge. Man must die in the body, but in his knowledge he was immortal. Such, somewhere, was her belief, quite obscure and unformulated. She believed in the omnipotence of the human mind. (*R* 173)

女は「ロゴス」に巻かれやすいというロレンスの言説はすでに見てきたが、第 1 世代よりもアナにはその傾向が強く見られる。「人類の知への崇拝」に執着する彼女ではあるが、救いは、それが「ほとんど自分自身に背いて」（“against herself”）いるという点だろう。

アナは変化を余儀なくされつつも、またウィルに対する愛情ゆえの葛藤を続けながらも、妊娠・出産を経て一定の安定を得る。もっとも、子どもはかわいいものの、彼女は「まだ十分には満たされていなかった。半ば開いた扉口のように、かすかながらまだ何かを期待する気持ちが残っていた」（*R* 195）という。そのような状態で目を凝らし、はるか彼方を眺め見る場面において、“rainbow”の語が 3 回用いられている。

> She was straining her eyes to something beyond. And from her Pisgah mount, which she had attained, what could she see? A faint, gleaming horizon, a long way off, and a rainbow like an archway, a shadow-door with faintly coloured coping above it. Must she be moving thither?
>
> [...] There was something beyond her. But why must she start on the journey? She stood so safely on the Pisgah mountain. [...]
>
> Dawn and sunset were the feet of the rainbow that spanned the day, and she saw the hope, the promise. Why should she travel any further? (*R* 195-96)

ピスガの頂から虹を仰ぎ見るアナは、そこに「希望、約束」を見、「これ以上、どうして旅に出る必要があるのだろうか」と自らに問いかける。しかし、引き続く以下の引用に見られる通り、また新たな赤ん坊を妊娠した彼女は、自らその約束の地に出かけることはない。

> There was another child coming, and Anna lapsed into vague content. If she

> were not the wayfarer to the unknown, if she were arrived now, settled in her builded house, a rich woman, still her doors opened under the arch of the rainbow, her threshold reflected the passing of the sun and moon, the great travellers, her house was full of the echo of journeying.
>
> She was a door and a threshold, she herself. Through her another soul was coming, to stand upon her as upon the threshold, looking out, shading its eyes for the direction to take.（*R* 196）

「満足感に浸り」、「もはや未知の世界への旅人ではなく、今はもう目的地に行き着いた、いわば豊かな女として、完成されたその家に落ち着いてしまった」アナ。彼女は「その戸口、その敷居」となり、そこから新たな可能性を秘めた子どもを送り出していく役割を果たさんとしている。

さて、アナが見るこの虹については、この場面の直前にノアの洪水への言及があり（*R* 187、see also 147）、また、物語のとりわけ前半部分の宗教的な雰囲気からも、誰もが「創世記」のノアの時代の大洪水後、神が希望の象徴として顕わした虹を想起することだろう。また、アナが虹を仰ぎ見ているピスガ[10]の地が、エジプト脱出後モーセのようやく辿り着いた地であり、また、その山頂から約束の地カナンを眺めたとされる場所であることを考えると、アナがモーセのような「預言者」、あるいは民族を約束の地へと導く「民族指導者」の役割を担っていることは間違いない。同時に、モーセが結局ピスガの地で命（いのち）を全うし、約束の地カナンを目前にして世を去ったように、アナもまたその約束の地に足を踏み入れることはできないことが暗示されているのだ（「申命記」3章1－5節参照）。

アナは「まだ十分には満たされていなかった」にもかかわらず、赤ん坊を産み、子育てをすることに自己充足してしまい、ピスガの頂から虹が見えたものの、先へ進もうとはしない。アナのこのような在り方について考えるにあたり、「トマス・ハーディ研究」（“Study of Thomas Hardy”）からの以下の引用は重要だろう。

> That she bear [*sic*] children is not a woman's significance. But that she bear [*sic*] herself, that is her supreme and risky fate: that she drive [*sic*] on to the edge of the unknown, and beyond.（*P* 441）

ロレンスは「女の存在意義は、子どもを産むことではなく、自分自身を生み出すことなのだ」という。そうだとすると、妊娠出産、そして母性に甘んじることで、自分自身を生み出すことに関心を示さなくなったアナ、先に進んでいくことを放棄してしまったアナは、「安全さ」（*R* 195）にあぐ

らをかく存在になってしまったと考えられる。その「安全」とはロレンスによれば以下のようなものであった。

> While we live, we change, and our flowing is a constant change.
> But once we fall into the state of egoism, we cannot change. The ego, the self-conscious ego remains fixed, a final envelope around us. And we are then safe inside the mundane egg of our own self-consciousness and self-esteem.
> Safe we are! Safe as houses! Shut up like unborn chickens that cannot break the shell of the egg. That's how safe we are! And as we can't be born, we can only rot. That's how safe we are!（"The Crown" *Phoenix II* 396、以下*PII*と略す）

アナは卵の殻を壊せないひな鳥に過ぎず、生まれ出ることもできず、あとは腐敗するのを待つだけの身だということになる。蛇の比喩でいえば、脱皮の危険を冒して、生の更新をもはや行なうことはない、まさに反生命なのだ。

第２世代に現れるもう一つ別の虹を検討するにあたり、ウィルについて見ていこう。彼の人物像として顕著な特徴として挙げられるのが、大聖堂に対する憧憬である。もともとウィルは教会の教義などには関心はなかったが、教会や大聖堂の建築物、窓に描かれる子羊などのシンボルに魅了されていた。リンカーン大聖堂を訪れた際の、とりわけその建物の描写に、計９回の"rainbow"の語の使用のうち、１回の使用が見られるのである。以下、引用してみよう。

> Away from time, always outside of time! Between east and west, between dawn and sunset, the church lay like a seed in silence, dark before germination, silenced after death. Containing birth and death, potential with all the noise and transition of life, the cathedral remained hushed, a great, involved seed, whereof the flower would be radiant life inconceivable, but whose beginning and whose end were the circle of silence. Spanned round with the rainbow, the jewelled gloom folded music upon silence, light upon darkness, fecundity upon death, as a seed folds leaf upon leaf and silence upon the root and the flower, hushing up the secret of all between its parts, the death out of which it fell, the life into which it has dropped, the immortality it involves, and the death it will embrace again.（*R* 201-02）

種子の様にたたずむ大聖堂の建物の内部が虹に喩えられている。「いうなれば七色の虹のかかる下

に、宝石の輝きを見せた幽暗が、沈黙には音楽、暗黒には光明を、そして死には生殖の豊饒さを包み込んでいるのだった」。そしてその中でウィルは「忘我」状態になり、「生の法悦」を感じている。建物内の要石と要石が上へと伸び上がり、アーチを作り、その頂点でウィルの心は恍惚状態になるのだった。

> Here the stone leapt up from the plain of earth, leapt up in a manifold, clustered desire each time, up, away from the horizontal earth, through twilight and dusk and the whole range of desire, through the swerving, the declination, ah, to the ecstasy, the touch, to the meeting and the consummation, the meeting, the clasp, the close embrace, the neutrality, the perfect, swooning consummation, the timeless ecstasy. There his soul remained, at the apex of the arch, clinched in the timeless ecstasy, consummated.
>
> And there was no time nor life nor death, but only this, this timeless consummation, where the thrust from earth met the thrust from earth and the arch was locked on the keystone of ecstasy. This was all, this was everything. Till he came to himself in the world below. Then again he gathered himself together, in transit, every jet of him strained and leaped, leaped clear into the darkness above, to the fecundity and the unique mystery, to the touch, the clasp, the consummation, the climax of eternity, the apex of the arch. (*R* 202)

アナもその場で大聖堂に圧倒されるが、ウィルの法悦には反発を感じている。外には「広い大空があるのに」、その「大屋根のかなたにある自由への権利」(*R* 203) を求めることもなく、「ただこの頭上、大屋根の下の隠秘の中」、閉じ込められた空間の中で、要石で作られている人工的な「虹」である大聖堂に情熱を燃やすウィルに、アナは耐えられない。そして彼女は、「人間の幻覚に対して完全な反駁を見せていた」、「子鬼の顔のような群像」に気づき、それらにウィルの意識を向けさせることで、彼の陶酔的交感を「ぶち壊そう」とする。

> "Oh, look!" cried Anna. "Oh, look how adorable, the faces! Look at her." (*R* 204)

「エデンにおける蛇の声」(*R* 204) のようなこの声かけにより、シンボルはシンボルに過ぎないことを知らしめ、彼の幻想を打ち壊し、その幻想世界から彼を連れ戻そうとしたのである。ここで彼女が目を向けさせた「小さな彫像、邪鬼、小鬼、人間の顔など」とは、ロレンスによると、「大聖堂には全一なるものが表明されている」とする一元論――唯一神――に対する否定でもある。つま

り、それらの彫像たちは「すべてが同一であるという一元論の大いなる結論に服従しながらも、なおも薄暗がりの中から絶対的なものの虚偽をあざ笑い、多様性、多元論を宣言している」のだった（*cf.* "Study of Thomas Hardy" *P* 454)。[11]　葛藤しつつもウィルは「教会の外に生命が存する」（*R* 206）という事実に思い至り、薄暗い大聖堂から抜け出し、外の大自然へと眼を向けることができるようになっていく（*R* 206)。

同時に彼は、人為的なものよりも自然で神秘的なものへと、美意識を傾ける対象を徐々に変えていく。もともとは「円のアーチ曲線が示す絶対美」（"Absolute Beauty"）よりも「人間の欲情の挫折とでもいったものを表わしていた」ゴシック様式の尖ったアーチに心惹かれていたウィルであったが（*cf. R* 237)、やがては丸いアーチへと憧憬の対象が変わっていくことになる。そして彼は「絶対美」というものが「不道徳」であるという理由でそれに「秘密の恐怖」を感じていた（*cf. R* 237）にもかかわらず、女性の丸みを帯びた肉体のアーチに「知を超越した」（"beyond knowledge"）「絶対美」を見ることができるようになる。[12]

> But now he had given away, and with infinite sensual violence gave himself to the realization of this supreme, immoral, Absolute Beauty, in the body of woman. It seemed to him, that it came to being in the body of woman, under his touch. Under his touch, even under his sight, it was there.（*R* 237）

このように、人工的な「虹」ではなく、自然の人間の肉体のアーチの美しさへと開眼していくことになる。丸みを帯びたアーチの美、そこにこそ、生命体にとっての重要な鍵が見出せるのだ。

ウィルはもともと、思考、精神性といったものよりも「触れ合い」の方を重んじる生命主義的なトムの流れを汲み、ブラングウェン家の「血の交歓」を受け継ぐ存在であった。例えば、「理性では理解できない物事の方を好む」(*R* 165)　彼は、アナとの闘いの際には「決して考えることはせず」(*R* 164)、「求めるのはただ触れ合いを通じて知ることだけ」（*R* 230）だった。このように、精神的なものよりも身体的、神秘的なものを好むウィルであったが、それを不道徳で恥ずかしく思うと同時に、恐怖心ゆえに否定してきたのだった（*cf. R* 144、162、182、186、187)。それもまた「灰色の小蛇」の影響といえるだろう。

彼らのように自意識過剰になってしまった現代人はどうすれば良いのだろうか。ロレンスは内なる蛇は殺そうとしても駄目であり、大事なのは、それを受け入れることだという。[13]

> If there is a serpent of secret and shameful desire in my soul, let me not beat it out of my consciousness with sticks. It will lie beyond, in the marsh of the so-called

> subconsciousness, where I cannot follow it with my sticks. Let me bring it to the fire to see what it is. For a serpent is a thing created. It has its own *raison d'être*. In its own being it has beauty and reality. Even my horror is a tribute to its reality. And I must admit the genuineness of my horror, accept it, and not exclude it from my understanding.（"The Reality of Peace" *P* 677、see also 678、679）

内なる生き物の存在を受け入れるために必要なことは、その内なる「高貴な獣」（"the honourable beasts"）の声に耳を傾けることである。

> Now we have to educate ourselves, not by laying down laws [...] but by listening. [...] But listening-in to the voices of the honourable beasts that call in the dark paths of the veins of our body, from the God in the heart.（"The Novel and the Feelings" *P* 759）

ウィルはアナとの葛藤を通じて、ある意味、彼女の「誘惑」により、蛇が象徴する内なる衝動を徐々に認めることができるようになっていったのである。

さて、ここでウィルとアナの描かれ方に目を向けよう。人物たちが多かれ少なかれ蛇のイメージで描かれていることはすでに第1章で触れた通りである。興味深いのは、第1世代において圧倒的に多いのが、蛇のような光り輝く目、蛙を睨むような、相手を捕らえ吸引する力を持った目の描写であったのに対して、第2世代のウィルの特徴の一つは「とぐろ」("coil") の使用が多いことである。「とぐろ」が蛇にとって全方位からの攻撃に備える究極の防御姿勢であることを考えると、彼の人生がアナとのまさに闘いの人生であったことを再確認させるものといえるだろう。ウィルが長い間、内なる蛇の要素を否定し続けてきたことを考えると、虎、鳥、もぐらなど、蛇以外の生き物にも多く喩えられるのも故なしというわけではない。もぐらに喩えられ、盲目性が強調される彼（*cf. R* 169）であるが、アナとの闘いを通して目を開き、ようやく自分の内なる蛇の存在を受け入れるようになっていくのだった。

ウィルと比較すると、アナの方が蛇のイメージで描写されることが圧倒的に多い。登場人物全体の中でも一番多いといえる。 目の描写はもちろんのこと、"dart forward"、"bite"、あるいは "hiss" といった、まさに蛇を想起させる描写が目白押しである（*cf. R* 67、70、80）。また彼女がマムシに喩えられることもある点についてはすでに触れた通りであり、読者はアナの内なる蛇の変化――「抽象的で、機能的、そして機械的」なものを求める存在への変化――を読み取ることができる。しかし、興味深いことに、大聖堂の中でウィルに外の大自然への開眼を促した「エデン園の蛇」（*R* 204）としての彼女の役割は、神秘主義的な生命の秘儀の知のメッセンジャーともいえるだろう。

彼女はウィルの幻想を打ち破り、大聖堂のような人工的なものより大自然のすばらしさへと開眼させる役割をも果たしているのである。彼女自身が「ロゴス」に縛られそうになり、「灰色の小蛇」に影響を受けつつも、内には依然として生命力の神秘を秘めていたといえるだろう。

しかしながら二人が到達した状態は以下のようなものであった。

> He was another man revelling over her. There was no tenderness, no love between them any more, only the maddening, sensuous lust for discovery and the insatiable, exorbitant gratification in the sensual beauties of her body. And she was a store, a store of absolute beauties that it drove him to contemplate. There was such a feast to enjoy, and he with only one man's capacity.
>
> [...] it was a duel: no love, no words, no kisses even, only the maddening perception of beauty consummate, absolute through touch. (*R* 236)

「優しさも愛もなく」、あるのはただ彼女の肉体がもつ官能美に対する「狂おしいばかりの探求欲と、飽くことのない強烈な情欲」ばかり。それは「決闘」に他ならないという。また次の引用も見てみよう。

> But in the revelations of her body through contact with his body, was the ultimate beauty, to know which was almost death in itself, and yet for the knowledge of which he would have undergone endless torture. [...]
>
> This was what their love had become, a sensuality violent and extreme as death. They had no conscious intimacy, no tenderness of love. It was all the lust and the infinite, maddening intoxication of the sense, a passion of death. (*R* 237)

このような「まるで死のような」「官能の宴に酔いしれる」夫婦関係をどう捉えるか、という問題について、鎌田氏は3つの意見に分類する（*cf.* 92-93）が、鎌田氏自身は「むしろウィルがアナの女体の上に顕現させたという怪しい美の世界に酔いしれることも、ロレンスが表わす男女関係のある一面を感知することになるのではないだろうか」（98）と肯定的に捉えている。「彼らは痴態を肯定した。[……] まさに痴態こそは美と、そして根源的な生の満足へと開花するいわば蕾だったのだ」（*R* 238）という状況はある意味、「ロレンスが表わす男女関係のある一面を感知すること」に繋がっているという鎌田氏の指摘には頷ける。

しかし同時に忘れてはならないのは、第1世代においては両者でアーチを形成できていたにもかかわらず、第2世代はM・スピルカ（Spilka）も論じるように「『虹』の状態に到達していない」（105）

という点である。第1世代においては、独立した個人同士がお互いに生命の流れを絡ませ合い、調和の取れた関係を構築したがゆえにアーチを形成することができたのに対し、第2世代は、内なる「灰色の小蛇」を克服し、お互いに闘いを通じて謙虚さを学んでいき、それぞれが変化し新たな生を更新しているにもかかわらず、最終的にはアーチの状態には達していない。それはどうしてなのだろうか。

まず、ウィルの“coil”やアナの“dart”など、闘いを喚起させる用語で描写されることが多い二人が、ロマンチックな場面でさえ「要塞」(“fortress”、*R* 235)や「決闘」(“duel”、*R* 236)といった闘いのイメージで描かれていたことを想起しよう。ロレンスは闘いそのものを否定しているわけではない。むしろそれを「神聖な」(*PII* 374)ものとさえいっている。闘いがあったからこそ二人がそれなりの関係を築けたのは事実である。しかし、物語の第6章のタイトル「勝利者アナ」も示す通り、二人はいずれかが勝ち、もう一方が負けるといった関係性で成り立っていた。「勝ち誇る者は滅びる」(*PII* 381)とは「王冠」(“The Crown”)におけるロレンスの言葉であった。

> He who triumphs, perishes. [...] Triumph is a false absolution [...].
> The true crown is upon the consummation itself, not upon the triumph of one over another, neither in love nor in power. The ego is the false absolute. And the ego crowned with the crown is the monster and the tyrant [...]. (*PII* 381)

対立関係にある両者にとって大事なのは勝ち負けではなく、「成就」なのであり、それこそが求めるべき「王冠」なのだとロレンスはいう。このように考えてくると、第2世代が虹を構築できなかった理由は一つには、第1世代と同様、お互いに正反対の対立する存在でありながらも、第1世代のように「互いに補い合う存在」(*R* 169)になることはなく、成就に至ることができなかったからだといえるだろう。

また別の理由も考えられる。ウィルは人工的な教会(大聖堂)の虹色のアーチではなく、女性の身体のアーチに「絶対美」を見出した後もアナとの闘いに苦しみ、葛藤を繰り返し、常に変化することを厭わず、「家、工場、電車といった外皮」を脱ぎ捨て(*R* 150)、やがて社会に目を向け、「目的をもった自我」(“purposive self” *R* 238)へと目覚めていく。他方、マムシに喩えられ、噛むイメージも多かったアナは、ウィルを「神秘的な知」へと導きもし、徐々に「彼の愛し方も学び、控えめになって」(*R* 209)いくものの、やがて「子育てに埋没する母親」(*R* 354)になってしまい、個性を見失っていく。ウィルにとって「絶対美の宝庫」(*R* 236)ともいうべき存在であるアナは母性に充足してしまい、約束の地には自ら出かけようともしないのだった。

問題のありかを探るにあたり、「二人の生活には何ら真の活動の余地も拡がりも無い」というス

ピルカの指摘は参考になるだろう（105）。また、彼らは両者の関係において、はっきりとした個性を築くことができていないと、ロレンス自身が次のように物語の中で記している。

> They were neither of them quite personal, quite defined as individuals, so much were they pervaded by the physical heat of breeding and rearing their young.（*R* 354）

結局、ウィルが社会に目を向け、個性を活かし始めたのに対し、アナの方が母性に埋没してしまい、新たな活動をすることもなく、個性を発揮することなく終わってしまっている点にも第 2 世代の限界があったといえるだろう。

第 1 、第 2 世代が達成できなかった虹の形成、男女による達成を、果たして第 3 世代のアーシュラが実現させてくれるのだろうか。彼女は日常生活と宗教的な二重の生活を送っていたが（*cf. R* 284）、それらの内面的な葛藤から抜け出すべく、外界への道しるべとなってくれるはずのスクレベンスキー（*cf. R* 290）との交際をスタートさせる。第 2 世代と同様、抽象的な「ロゴス」中心で生きる世代はどうしてもぶつかり合うことが多く、それはどちらかが負けるまで続く闘いなのだ。有名な月夜（フレッドとローラの結婚式の夜）の場面において、アーシュラは蛇の目のように「じっと見つめる月」（*R* 318）に取りつかれ、月との「交歓」に酔いしれ、彼に対する「破壊衝動」（*R* 319）を覚えるのだった。それは、ロレンスのいう、満たされない魂が相手を呑み込もうとする状況だといえるかもしれない。

> Then the unconsummated soul, unsatisfied, uncreated in part, will seek to make itself whole by bringing the whole world under its own order, will seek to make itself absolute and timeless by devouring its opposite.（“The Crown” *PII* 379）

新生するにあたって破壊作用が必要であることを考えると、スクレベンスキーの新生のためには彼女のその働きかけは必要なものだったといえるかもしれない。しかし、彼女は「神のような月」（*R* 324）の影響のもと、「彼の存在を完全に消し去ってしまい」、彼は死んだも同然になってしまうのだった（*cf.* 322-23）。彼を回復させようとするアーシュラの努力も空しく、結局彼はアーシュラと闘うこともなく、南アフリカへ去ってしまう。

軍隊をはじめとする全体主義的なものに支配され、生命体としての自己を見失っているスクレベンスキー、脱皮するイメージで描かれることのないスクレベンスキー、そのような彼を見限ったアーシュラは、その後、トムやリディアには見られなかった社会的な自我の成長を志向し、まず、ブリンズリ・ストリート校の教師になろうとするのだった。しかしそれは、60人の子どもたちを

「一つ心」(“one state of mind”)に還元していく仕事であり、「自動機械的」にやらざるを得ない教育の現場、そして権威を子どもたちの意思に押し付ける学校や教師のやり方、それらすべてに辟易しつつ、魂を犠牲にして男の世界で闘うアーシュラだった(*cf. R* 423)。空しい勝利を収めながら、その勝利したものを殻として脱ぎ捨て、彼女は次に、大学での経験に期待を膨らませる。入学し講義を通じて「好奇心をそそる喜び」(“curious joy”)(*R* 431)を得られるものと幻想を抱いていた彼女であったが、実際の学生たちに接し、また、大学教育、そして教授陣を通じて、彼女はそれが幻想に過ぎなかったと悟る。プラトンのいうように「完璧なイデア」を求めて進むと、その行き先は「墓場」になるのである(*cf.* “Him with His Tail in His Mouth” *PII* 429)。

このようないわば「ロゴス」の世界に失望したアーシュラに転機が訪れる。それは生物学の授業の時のことだった。顕微鏡で生き生きとした植虫類を覗き込んだ際、その生命体に触発され、自身の心の中でも変化を感じることができたのだ。生物が求めるべきことが何なのか、次のような悟りの境地に達する。

> She only knew that it was not limited mechanical energy, nor mere purpose of self-preservation and self-assertion. It was a consummation, a being infinite.(*R* 441)

「機械的な」ものではなく、「永遠なるものになること」、「成就」を求めることこそが生き物の生きる目的だと悟るのだった。そしてアフリカから戻ってきたスクレベンスキーとの関係に再び期待をかけ、彼との新たな関係において生を解放しようとする。

アフリカの闇を経験した彼は一見変化したかと思いきや、結局、変化することのできない存在だったことが分かる。彼は初めての出会いの時から次のように脱皮できない人間として登場していた。

> He seemed simply acquiescent in the fact of his own being, as if he were beyond any change or question. He was himself. There was a sense of fatality about him [...]. So he seemed perfectly, even fatally established [...].(*R* 291)

二人の逢瀬の後、「本当の自分」というものを確立し、一人でも行動をするようになったアーシュラ(*cf. R* 451-52)とは対象的に、彼は一人では「存在そのものが崩れ去ってしまう」(*R* 457)人間であることが明らかとなる。アーシュラは彼の表層的なものに惹かれていただけであり(*cf. R* 293)、スピルカの指摘する通り、彼は依然として「ロゴス」に縛られたままの存在であり、その存在の核の部分が無意味で存在しないも同然であったため(*cf. R* 113)、彼女の内なる「非人間的な炭素」が彼を拒否したのだった。

スクレベンスキーとの最後の逢瀬においても月はアーシュラに働きかけ重要な役割を果たすが、彼がふさわしくない相手だと分かり、彼女は結婚を断り、別れることになる。その後、妊娠の可能性を感じとり、一旦は母性に埋没するアナの生き方に共感し、子育てに専念する道を理解しようとする。しかしそのようなアーシュラに自然界の生命力は黙ってはいない。内なる高揚を感じた彼女が雨の降りしきる中、森の中へ入っていくと、そこで馬の群れと遭遇することになる（*cf. R* 486）。自らの内なるものを否定して赤ん坊のためにスクレベンスキーとのよりを戻して生きる決意をするも、「人間の強烈な動物的生命力の象徴」（*Sketches of Etruscan Places* 165）である馬の群れに襲われる（*cf. R* 487-90）[14]ことで、アーシュラは改めて内なる「不変で深遠なる知」（*R* 491）の存在に気づき、それへと覚醒していくのだった。このエピソードでアーシュラは内なるものを再確認したに違いない。

以上、見てきた通り、アーシュラは「知識やベストなものを求め」、学校教育、大学教育などに希望を繋げるが、ことごとく幻滅し、古い殻をその都度脱ぎ捨て、やがて生物学の授業で生命の神秘に触れた彼女は再びスクレベンスキーとの関係に希望を求めるものの、結局は破局を迎えることになってしまうのだった。体調を崩したアーシュラにどんぐりの殻がはじけるイメージ（脱皮のイメージ）（*cf. R* 495）が迫り、その後、まどろみ状態を経て、内なる衝動に目覚めた彼女の意識は「未知の、未探検の、未発見の地」（*R* 494）に辿り着く。そこで冒頭で挙げたように、虹を見るのだった。

## 第３章　物語の結末解釈

３世代に亘って虹やアーチの扱いや、それぞれの世代の人物たちの在り方を概観してきたが、本章ではアーシュラが最後に見る虹を新たな視点で解釈しなおすと同時に、本作品における虹やアーチの意義を検討したい。

自然現象としての虹といえば、第２世代のアナも虹を見ているが、すでに議論をした通り、この場面における虹はまさに聖書における「希望の象徴」であるといえるだろう。では物語の結末でアーシュラが見る虹はどうだろう。この虹が何を象徴しているのか、という点については批評家たちがそれぞれの議論のテーマに応じて様々な考えを述べている。[15]　本稿における筆者の関心は、それが多かれ少なかれ、読者に希望や、「『新たな成長』の約束」（Draper 73）といった、人間にとって肯定的な意味合いに受け取られている点にある。物語全体が聖書的含蓄に富んでいる（*cf.* Ford 134）ことから、この虹も聖書的な意味合いで希望の象徴として受け取るのが一般的であるといえる。実際「はじめに」で引用した物語の結末部分において明らかなように、アーシュラ自身が「希望」を感じとってはいる。しかし、果たしてそれは、旧来のキリスト教的な意味での希望の象徴なのだろうか。

ここで注目すべきは、アーシュラには常にキリスト教に対する二律背反的な言動が見られるとい

う点、神批判さえ時として見られるという点である。ノアの大洪水のエピソードに関してアーシュラが神を批判していたことは、すでに「はじめに」で触れた通りであり、他にも、聖書の中の「罪」と結びつけられる蛇に関して、彼女は「実際の罪などは存在しない」（*R* 274）と感慨を述べたり、また、彼女はキリスト教の福音書が語ることをそのまま実行する気にはなれず（*cf. R* 285）、「霊の世界」と「物の世界」との狭間で自由を求め葛藤を繰り返す（*cf. R* 288）。このようなアーシュラがそうやすやすと批判の対象ともいうべき神が現した虹を肯定的に受け入れているとは考えにくいのではないか。ある意味「不敬な」アーシュラが、最後にキリスト教的な神の恩寵としての希望の虹を見ることがありえるだろうか。

ここで提示したいのは、「虹蛇」の概念である。虹は蛇が天がけて造りだしたものだという言い伝えや神話・伝説は様々な国で残っており、虹蛇は太古の民族たちが信じていたという記録が多く残っている。オーストラリアをはじめ、西アフリカや中央アフリカの国々においても同様である（*cf.* ハーグリーヴス 48）。また中国の伝説においても虹が龍の一種とみなされていたという。[16]

様々な地域において伝説が残っているからには、ロレンスも当初からそれらの伝説を知っていた可能性が高い。たとえそうではなかったとしても、『黙示録』を書いた段階で彼はその事実を知っていた。すなわち、ロレンスは『黙示録』の中で「龍崇拝は世界中で、とりわけ東洋において、今でも積極的に行なわれており、強い影響力を持っている」（*A* 92）と述べ、中国における緑龍、ヒンズー教徒たちのいう人間の脊椎の基部でとぐろを巻く龍の話などにも触れた後、次のように虹蛇のイメージを明確に記している。

> The new dragon is green, or golden, green with the vivid ancient meaning of green, which Mohammed took up again, green with that greenish dawn-light which is the quintessence of all new and life-giving light. The dawn of all creation took place in greenish, pellucid gleam that was the shine of the very presence of the Creator. John of Patmos harks back to this when he makes the iris or rainbow which screens the face of the Almighty green like smaragd or emerald. And this lovely jewel-green gleam is the very dragon itself, as it moves out wreathing and writhing into the cosmos.（*A* 94）

聖書の「ヨハネの黙示録」においては、確かに虹も龍も登場するが、虹は「王座の周りにかかる」（第４章３節）、あるいは「天から下ってくる天使」の頭上にかかる（第10章１節）神々しい存在として、また、龍は虹とは全く別物の邪悪な悪魔、あるいはサタンとして扱われている（第12章９節、第20章２節参照）。この事実を踏まえると、この引用において龍を「愛らしい宝石のように緑に輝き、コスモスへと天がける虹」と捉えるロレンスの発想がいかにキリスト教的なものから逸脱し、

異教的なものとなっているかが分かる。

もっとも、晩年になってロレンスが虹蛇の表象を明確に意識しているからといって、『虹』執筆時期にそれを念頭に置いていたということには必ずしもならない。しかし、ロレンスのこのような虹観を念頭に置いて、もう一度作品を読み直すと、物語全体を貫く一つのイメージ――虹蛇の表象――が浮かび上がり、作品の一貫性が見えてくるのである。

本稿第１章において、『虹』の中で大自然を龍や大蛇のイメージで描写をするロレンスの技法について触れたが、物語の冒頭においても「眠ったような」エレウォッシュ川がくねくねとうねるように流れていたことを思い起こそう。

> The Brangwens had lived for generations on the Marsh Farm, in the meadows where the Erewash twisted sluggishly through alder trees, separating Derbyshire from Nottinghamshire.（*R* 7）

声を出して読むと、ここでも特に後半部分で「シューシュー」という蛇の存在を感じさせる音を効果的に用いていることが分かる。

また、ブラングウェン家の者たちが野良で、教会から目を逸らし、地平に連なる大地に目を移すと、はるか彼方に「何か」が存在することに気づくという。

> Two miles away, a church-tower stood on a hill, the houses of the little country town climbing assiduously up to it. Whenever one of the Brangwens in the fields lifted his head from his work, he saw the church-tower at Ilkeston in the empty sky. So that as he turned again to the horizontal land, he was aware of something standing above him and beyond him in the distance.（*R* 7）

この「何か」とは、ここまで見てくると、大自然の神あるいはその「潜勢力」を表わす龍だといっても過言ではないだろう。

虹を大自然の龍の天がけた姿と捉える想像力をもって物語を最初から最後まで読み通せば、アーシュラが最後に見る虹は、物語の導入部分で眠っている大蛇のようなエリウォッシュ川がまどろみから目を覚まし、虹となって天がけた姿として、また、彼女に影響を与えてきた大蛇の目のような月をはじめとする大自然の様々な大蛇（龍）が、虹となってコスモスに駆け上った姿として立ち現れたものだといえなくない。大自然の「生き生きとした神」（“the living God” *R* 495）の顕現そのものといえるだろう。それは、「かつては若々しかった」（*P* 733）にもかかわらず、今では「過

去の偉大さ」（*P* 734）を享受している「多数派」のキリスト教徒たちの信じる「神」ではなく、ロレンスが「『神』を求めて新たな冒険を始めなくてはならない」と「書物」（“Books”）の中で高らかに謳い上げる、新たに目指すべき神なのである。[17]

> I know the greatness of Christianity: it is a past greatness. I know that, but for those early Christians, we should never have emerged from the chaos and hopeless disaster of the Dark Ages. If I had lived in the year 400, pray God, I should have been a true and passionate Christian. The adventurer.
>
> But now I live in 1924, and the Christian venture is done. The adventure is gone out of Christianity. We must start on a new venture towards God.（*P* 734）

多かれ少なかれ人物たちに影響を与えていた大自然の龍（大蛇）が、最後にキリスト教的な神ならぬ、異教的な大自然の神として、水野拓によれば「造物主」「文化英雄」「豊饒の神」「大父神」として（98）、コスモスへくねくねと舞い昇り、人類にメッセージを届けてくれているかのようである。

ではそのメッセージとは一体何なのだろうか。それは希望に満ち満ちたものと果たしていえるのだろうか。アーシュラが人々の将来に希望を見出しているのは確かである。

> And the rainbow stood on the earth. She knew that the sordid people who crept hard-scaled and separate on the face of the world's corruption were living still, that the rainbow was arched in their blood and would quiver to life in their spirit, that they would cast off their horny covering of disintegration, that new, clean, naked bodies would issue to a new germination, to a new growth, rising to the light and the wind and the clean rain of heaven. She saw in the rainbow the earth's new architecture, the old, brittle corruption of houses and factories swept away, the world built up in a living fabric of Truth, fitting to the over-arching heaven.（*R* 495-96）

「堅い鱗」をよろい、この朽ちた地上を這い回る人間たちの「血の中にも虹は架かり」、彼らが「その崩壊の角質の殻を脱ぎ捨て、清潔な新しい赤裸な肉体が、新しい発芽、新しい成長へと息づき始め」ているのを感じている。虹の中に彼女は「大地の新しい構築」を、「『真理』の上に構築された生きた世界の姿」を見たのである。

アーシュラ個人についても見てみよう。現実生活からかけ離れた夢幻の世界にあこがれるアーシュラ、夢見がちな彼女は、もともと「教会に対する隷属的な奉仕」をし、「見えもせぬ神」（“an

unseen God”）を拝むことばかりに熱中していて、「卑屈」であるとアナが非難するウィル（*R* 275）と同様の立ち位置だった（*R* 274-76）。しかし、彼女は成長と共に変化を見せていく。虹を見る直前のアーシュラの描写を以下に引用してみよう。彼女が脱ぎ捨てるべき殻と彼女自身との間にスペースができているというのである。これはまさに脱皮のイメージであり、脱皮による彼女の新生の期待を抱かせるものとなっている。[18]

> This grew and grew upon her. When she opened her eyes in the afternoon and saw the window of her room and the faint, smoky landscape beyond, this was all husk and shell lying by, all husk and shell, she could see nothing else, she was enclosed still, but loosely enclosed. There was a space between her and the shell. It was burst, there was a rift in it. Soon she would have her root fixed in a new Day, her nakedness would take itself the bed of a new sky and a new air, this old, decaying, fibrous husk would be gone.（*R* 493）

このように見てくると、アーシュラはもちろんのこと、人々が新たなる生命力を回復することに対しても期待は大いに持てそうである。

しかし、同時に忘れてはならないのは、3 世代に亘る人間の著しい変化に応じて、ロレンスが世代毎の虹やそれに関連するアーチの現れ方に違いを設けているという事実である。その違いを考慮に入れると、アーシュラが感じ取る希望といっても、そこにはある種の困難さが伴うという大前提があるといわざるを得ないのである。もともと新生に困難さがつきものであることは、蛇の脱皮を見ても分かる。すなわち、蛇の脱皮は失敗すると死に至る危険性も伴う一種の破壊作用であり、同様に、人々の脱皮にはそれなりの危険が伴う可能性があるということなのだ。希望はあるものの、古い角質を脱ぎ捨てるにあたっての困難さ、苦しさを乗り越えることができるかどうかについては予断を許さないということである。同時に、通常の脱皮の困難さに加え、生体そのものの在り方の変化ゆえに、困難さが増すだろうことが予兆されているのである。

以下にその困難さを予期させる要素を挙げてみよう。まず、第 1 世代が男女自らでアーチを築くことができているのに対し、後の世代については、アーチを男女自らが作れていないという事実がある。第 2、第 3 世代は、トムとリディアのような「天と大地の交流」（*R* 8）を知り得ていない。自らで虹を作ることができず、虹を外在化した形でしか見ることができないということは、蛇の象徴する要素、つまり「生命力」や「潜勢力」が個体の中で低下してしまっている可能性がある。実際、内なる生命力を表わす蛇の描写が世代を下るにつれ減ってきている（*cf.* eBook）のも、故なしというわけではないのである。

そのためもあってか、第1世代においては自然界のものが直接人間に何らかの影響を与えるという描写がほとんど無いのに対し、とりわけ第3世代においては月をはじめとする自然からの働きかけが増えている。もともと人間は自然の一部であったが、時代を経るにつれ、神秘の世界である自然界から分離していき、文化・文明を生み出し発展させてきた。すでに見てきた通り、本来、大自然の内なる龍と同一の「潜勢力」を具えていたはずの人間の内なる龍は、次第に「灰色の小蛇」へと変化を余儀なくされてきたのだ。それに巻きつかれ、自然との交歓がもはや不可能になりつつある現代人に、自然の大いなる緑龍は活力を再び与えようと、外部から人間に働きかけざるを得ないのである。

次に、アーシュラとアントニーとの関係にも目を向けてみよう。原初的な感性の持ち主であり牧神にも喩えられる（*cf. R* 413）アントニーとアーシュラとの違いが著しい。アントニーは目で月を見なくとも、それと一体になれる存在であり、見ないと一体になれないアーシュラとの違いがはっきりと示されている。それは視覚重視か否か、「ロゴス」重視か否かの違いといい換えることもできるだろう。知的にしか考えられないアーシュラは、「エデンの園」のようなアントニーの世界にはもはや属することができないと自ら感じ取っており、彼に惹かれつつも結局は求婚を断ることになる（*cf. R* 416）。鈴木俊次氏も述べる通り、アントニーとの「血的交流」に基づく生活を拒んだことは、「現代世界における『楽園』とはもはやあの第一世代のマーシュ世界に直線的に回帰することでは見出せないものであることを物語っている」（17）のである。このようにロレンスは、現代人が原始に戻れるとは必ずしも考えていない。

ここで、第1世代が築くアーチに色がついていなかった理由を考えてみることにしよう。アーチを作り、「豊かで」、「永遠のもの」（*R* 129）を得たはずであったにもかかわらず、どうしてそれは「未完成、未熟」（“unfinished and unformed” *R* 135）なものと表現されているのだろうか。第2世代のウィルの成長を追ってみると、母性の中でたゆたうアナを尻目に、彼は「生まれて初めて」社会のことに興味をもち、「深い官能生活から、やっと真の目的をもった自我に目覚めた」（*R* 238）というように、社会に目を向けていくことになる。アーシュラも同様に社会に目を向け、その中で自己達成を試みている。一方、トムは「結婚以外に他に大事なものなんて、この地上には何もない」（*R* 138）といい放ち、結婚そのものを人生の目的にしてしまっている。彼には仕事や社会への志向が全く見られない（*cf. R* 129）のである。K・セイガー（Sagar）も新世界へと更なる探求を続けることはしないトムとリディアに対して、それこそが第1世代の「限界」（51）であると論じていることを思い起こそう。

ロレンスは「無意識の幻想」（“Fantasia of the Unconscious”）の中で次のように「目的をもった活動」（“purposive activity”）の必要性について論じている。

> And I am sure that the ultimate, greatest desire in men is this desire for great purposive activity. When a man loses his deep sense of purposive, creative activity, he feels lost, and is lost. (109)

このように見てくると、第１世代に欠けているもの、虹の色が暗示するものは社会に目を向ける「目的をもった自我」(“purposive self”) であったと考えても、あながち間違いとはいえないだろう。物語の結末部分でアーシュラにアナへの思いを逡巡させる場面があるが、ロレンスは最終的にアーシュラに、母性に甘んじ個性を発展させようとしないアナの生き方を否定させている。

以上のことから、第１世代やアントニー、そしてアナのような存在様式に戻り、個性を埋没させてしまうことをロレンスは必ずしも良しとしていないことが分かる。大洪水によるトムの死、そしてアーシュラによるアナの否定は、まさに彼らの存在様式の死と否定を暗示しているのである。

依然として問題は残る。ロレンスは一体アーシュラにどのような将来を託したのだろうか。モイナハンは結末に関して、「新しいアーシュラ」や彼女が到達した「未知の土地」といっても、何の具体的な描写も定義もないとして、ロレンスが「新たな成長の様式」を提示することができていないと批判する (68-69)。過去に戻ることができないとすれば、彼女はひたすら現代文明の流れに身を任せていくべきなのだろうか。社会に目を向けた彼女はことごとく失望し、挫折を繰り返すしかなかったではないか。ハフが結論づける通り、結末からは「曖昧な希望」(“a vague hope” 72) しか得られないのであり、モイナハンが指摘する通り、彼女の将来の在り方については一見ロレンスは保留しているように見える。

しかし、次の事実を見逃すわけにはいかない。すべての人間が自然に寄り添うことができるわけではない中、アーシュラは少なくとも大自然の声に耳を傾けることができる人間として終始描かれているのである。典型的な例が月夜の場面に現れている。月はアーシュラに取りつき、すべてを暴露し、彼女は徹底的にスクレベンスキーを破壊してしまうのだが、この場面で注目すべきは、スクレベンスキーが月の作用を全く受け入れることがないのに対し、アーシュラは月の力を借り、月との交流を体験している点である。彼女は少なくとも、スクレベンスキーとは異なり、自然界の影響力、「潜勢力」を受け入れることができているのだ。W・フランクへの手紙 (1917年７月27日付) にロレンス自身がしたためたように、この小説はただただ「破壊的」である『恋する女たち』とは異なり、「破壊的である」と同時に「願望の成就」をも含んでいるのである。[19]

結末は確かに曖昧で不安も残らなくはないが、ロレンスの『黙示録』の言葉――「太陽と共に始めよ」――ではないが、まずは自然に寄り添い、自然の中で自らを解放することから始めるしか他に道はないのである。そうすれば、他のことは「徐々に継起するであろう」とはロレンスの言葉であった。

Start with the sun, and the rest will slowly, slowly happen.（*A* 126）

## おわりに

以上、3世代に亘り、虹やそれと関連する表象に注目しつつ、それぞれの男女の関係性を見てきた。虹あるいはアーチの表象を、蛇や龍のイメージあるいは象徴との関連で解釈してきたわけだが、明らかに世代毎に描き分けていると考えられるそれらの描写に着目し、その違いを考察することは意味あることだったといえるだろう。

キリスト教色の濃い本作品における結末でアーシュラが見る虹は、一般的には聖書的な意味合いが含まれていると考えられるが、そこに虹蛇の顕現を見ることもあながち牽強付会とはいえないことも明らかにした。世界に広がっている虹蛇的あるいは異教的な希望を、アーシュラが感じ取っている可能性を読み取ることができる。『虹』において、大自然もまた蛇や龍のイメージで描かれ、それらは人間に影響を与えているわけであるが、虹はまさにそのような「蛇がコスモスへとくねくねと上った姿」と捉えることができ、それを人物たちにとっての希望の象徴として見ることができるのである。

物語は「全く即席で裏づけがない」というリーヴィスの批判や、「この本の中の何一つとして最後の虹のヴィジョンへと繋がるものはない」といったハフの批判もあったが、以上検討してきた通り、蛇を中心とした関連の象徴やイメージ群を駆使して読み解き、結末の虹を、川をはじめとした大自然の生命力（龍、大蛇）が天がけたものであるという虹蛇の概念で捉えると、彼らの批判が必ずしも的を射ているわけではないことが分かる。物語全体はむしろイメージ的に有機的な統一が図られており、結末へと向かうための前兆、筋書きは巧みに仕組まれていたといえる。虹が最後に登場する必然性はあったのである。

また、結末をそのように捉えれば、人類に対する期待や希望を読み取ることは当然可能であるが、同時にロレンスは、すでに見てきた通り、現代人の未来予想図を必ずしも明るいものとして提示してくれていないことも最後に強調しておきたい。現代人が意識的になり、神秘的なエデンの園のような自然界からある意味追い出され、もはや昔には戻れない以上、楽観視はできないという彼の深刻なメッセージも受け取ってしかるべきだろう。このように考えてみると、アーシュラが結末で見る希望の虹は、多くの問題を抱えているという前提に基づいた希望の表象となっている。藤原満寿子氏も指摘する通り、「達成のシンボルであるよりはむしろ、達成への切望のシンボル」(203)なのである。[20] もはや男女で共に虹を築くことが非常に困難になりつつある現代人の在り方を受け入れた上で、今後どう生きるべきかをアーシュラに探るロレンス。大自然に身を委ねることを「知っている」アーシュラにその希望を託すのであった。

限りなく悲観的な問題提起をしつつも、最後まで希望を捨てないロレンス。常に何らかの希望を

託さずにはおられないロレンス。それはまるで過酷で厳しい冬を耐え抜き、春に新芽を芽吹かせる大地に対する絶対的な信頼を元にした希望のようなものかもしれない。冬枯れの状態があるからこそ、新緑の芽吹きは輝かしさを増し、まぶしく映える。このようなロレンスの究極の楽観主義的特性が、彼の「大地的想像力」からきていることを、筆者は拙論「《ロレンスとバシュラール》〈物質的想像力〉を駆使した『プロシア士官』の読み」ですでに論じたことがある。悲観論に落ち込むことなく、新たな生命を毎年更新してくれる大地への限りない信頼を決して失わない作家、それこそがまさにロレンスなのである。

虹が我々読者にも何か明るい希望を抱かせてくれるのは事実である。虹を生命への絶対的な信頼、「生命が決して滅びることはないことの徴（しるし）」と捉えるロレンスの書簡（1917年２月23日付のドリー・ラドフォード宛）を最後に引用することで論を締めくくることにしよう。

> The world of nature is wonderful in its revivifying spontaneity. But oh god, the world of man—who can bear any more? I can't bear any more of mankind. [...] At any rate, the cooing of the doves is very real, and the blithe impertinence of the lambs as they peep round their mothers. They affect me like the Rainbow, as a sign that life will never be destroyed, or turn bad altogether.（*The Letters Vol. III* 97、下線部筆者）

## 注

1　例えば、『チャタレー卿夫人の恋人』の結末もコニーとメラーズの二人が共に生活をできるような日が訪れるのかどうかが曖昧なまま終わり、「プロシア仕官」、「島を愛した男」、「太陽」等々、その結末が暗示に富み、明確な方向性が見えない作品が多い。

2　同時に、その未完成さをむしろ肯定する批評家として、「ロレンスは生の果てることなき変化を信じた芸術家であった。そうした芸術家にとっては、主題的に、完全に自己完結的な作品などありえようがないのだ」(140-41) と弁護したＣ・ナハール（Nahal)、他にもＡ・フリードマン、Ｓ・Ｊ・マイコ、Ｆ・カーモード、そして、スピルカなども挙げている（*cf.* 甲斐 39-40)。

3　西村氏は「肉の復活」(68)、今泉氏は「救い」(187)、藤原氏は「虹のシンボルは悪しき古き世界の解体と彼岸の世界への約束を暗示するもの」(194)、「新しい契約の徴」(201) と表現している。また鈴木氏も複数の批評家の捉え方を紹介しているので参照のこと (18-19)。

4　その際、一見虹とは何の関係もなさそうな蛇の表象にもこだわることになるが、その関連性については第１章において触れているので参照のこと。

5　因みに、今回、日本ロレンス協会第46回大会（2015年６月28日、愛知大学）におけるワーク

ショップ（「D.H.ロレンス『虹』を読む――『虹』出版100周年にあたって――」）において「科学・機械文明を告発する『虹』――蛇の表象を巡って――」というタイトルで発表をするにあたり、ネット上のeBookの*The Rainbow*を利用して検索した結果、人物を表現するにあたり、“snake”、“viper”、“serpent”と、直接蛇を表わす用語が用いられているのはもちろんのこと、その他にも、蛇独自の属性を想起させる語が頻繁に用いられていることが分かった。大自然を蛇のイメージで描くという技巧は*The Trespasser*の中ですでに見られるが、人間を蛇のイメージで描く技法は*The Rainbow*以前の*White Peacock*や*The Trespasser*あるいは*Sons and Lovers*といった長編小説には見られないことを指摘しておきたい（*cf.* eBook）。

6　その他のロレンスの随筆なども考慮に入れると、「性の衝動」なども含む包括的な意味での「生命力」を表わしているといえる。

7　*Sketches of Etruscan Places* 164-65、“Hopi Snake Dance” 92も参照のこと。

8　本稿中では、人類が機械化・文明化することで求めるようになった知的精神的な知を「ロゴス」、神秘的な神の言葉、神の知、宇宙の理を「　」なしのロゴスと表記した。

9　ロレンスは「王冠」の中ですでに虹を「対立するものどうしの完全なる合一」と捉えている（PII 373）。

10　死海の北東端に近いアバリム山脈の一部。モーセがエジプト脱出後、ようやくこの地にたどり着き、山頂から約束の地カナンを眺めたのみで逝去した土地。「ピスガ」にはヘブライ語で「裂け目」の意がある。

11　「王冠」においてもロレンスは唯一神を奉じることについて否定的な見解を示しているので参照のこと（*PII* 379-80）。

12　アナの首がやはり「アーチのような」と形容されていたことを想起しよう（*R* 136）。

13　“Snake”の詩のテーマの一つもまた、あるがままの蛇の存在を認めよ、というものであった（同じテーマをもつColeridgeの*The Rime of the Ancient Mariner*も詩の中で扱われていたことを想起しよう）。

14　ロレンスは夢分析の中で馬についても論じており、内なる「強力な官能的（肉欲的）な生命力（ネイチャー）」を解放したいと望む、抑圧された自己が、馬におびえる夢を見る（*cf.* “Fantasia of the Unconscious” 170-71）と述べている。

15　虹の形態からそれに二つのものの調和を見るハフ（“the harmony of seen and unseen” 59）、M・ハウ（“a symbol of eternal reality, born of the interpretation of light and matter” Howe 36）、セイガー（“a symbol of the reality— ‘new heaven and earth,’ ‘a whole new world,’ ‘all that is to be’” 68）、そしてスピルカ（“both elements—vertical and horizontal, spiritual and sensual [...] the symbol of a new kind of oneness with the Infinite [...] and

of a new kind of 'holy knowledge'" 95）を参照。他にもM・フリーマン（"the triumph of sensory life" Freeman 55）も参照のこと。

16　漢字の「虹」が虫偏であるが、その「虫」が蛇を指していたことは、よく知られている。他にも、『日本書紀』「雄略紀」にも、虹を蛇に喩える描写が存在している。

17　虹蛇の概念を持ち出さずとも、ロレンスの代表的な詩の一つである「蛇」（"Snake"）を想起すれば、この虹に「今は流浪の身」を余儀なくされ地下に潜んでいる「生命の王」が地上に現れ、再び「王冠を戴いた」姿だと読み取ることも可能かもしれない。因みにロレンスは「王冠」を書く段階ですでに蛇を「新たな生命の[……]王」と捉えていたことを指摘しておこう（"[...] he emerged a king out of chaos, a long beam of new life." *PII* 407）。

18　他にもアーシュラが新生する期待を抱かせるものとして、どんぐりの殻がはじけて中から果肉が飛び出すイメージも存在していることを指摘しておきたい。本作品のイメージの豊かさを示している。

19　ロレンスの手紙の文面は以下の通りである。"This actually does contain the results in one's soul of the war: it is purely destructive, not like the R*ainbow*, destructive-consummating."（*LIII* 143）

20　そしてその探索は『恋する女たち』に引き継がれることになるが、その続編の結末もまた曖昧なものとなっている。

## 引用文献


Draper, R.P. *D.H.Lawrence*. London: The MacMillan P, 1976.

Ford, G.H. *Double Measure*: *A Study of Novels and Stories of D.H.Lawrence*. New York, The Norton Library, 1965.

Freeman, M. *D.H.Lawrence*: *A Basic Study of His Ideas*. New York: The Uiversal Library, 1955.

Gilbert, Sandra. *Acts of Attention*. London: Cornell UP, 1972.

Hough, G. *The Dark Sun*. Aylesbury: Duckworth, 1956.

Howe, M. B. *The Art of the Self in D.H.Lawrence*, Athens, Ohio: Ohio UP, 1977.

Leavis, F.R. *D.H.Lawrence: Novelist*. Harmondsworth, Penguin Books Ltd., 1976.

Lawrence, D.H. *Apocalypse*. Harmondsworth, Penguin Books Ltd., 1977. (*A*)

---. *The Complete Poems of D.H.Lawrence*. Ed. Vivian de Sola Pinto & F.W.Roberts. New York: The Viking P, 1971. (*CP*)

---. "Fantasia of the Unconscious." *Fantasia of the Unconscious & Psychoanalysis and the Unconscious*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1977.

---. “Hopi Snake Dance.” *Mornings in Mexico and Other Essays*. Cambridge: Cambridge UP, 2014.

---. *The Letters of D.H.Lawrence Vol. III 1916-21*. Ed. J.T.Boulton & A.Robertson. Cambridge: Cambridge UP, 1984. (*LIII*)

---. *Phoenix*. Ed. E.D.McDonald. New York: Viking P, 1968. (*P*)

---. *Phoenix II*. Ed. W. Roberts & H.T.Moore. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1978. (*PII*)

---. *The Rainbow*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1974. (*R*)

---. *Sketches of Etruscan Places and Other Italian Essays*. Ed. S. de Filippis. Cambridge: Cambridge UP, 2002.

Moynahan, J. *The Deed of Life. The Novels and Tales of D.H.Lawrence*. Princeton: Princeton UP, 1972.

Nahal, Chaman. *D.H.Lawrence: An Eastern View*. New Jersey: A.S.Barnes and Company, 1970.

Sagar, K. *The Art of D.H.Lawrence*. Cambridge: Cambridge UP, 1975.

Spilka, M. *The Love Ethic of D.H.Lawrence*. Bloomington & London: Indiana UP, 1955.

今泉晴子.「アーシュラにおける救済」.『ロレンス研究――「虹」――』. 朝日出版社, 1988：145-188.

甲斐貞信.「序にかえて――エリウオッシュ渓谷と『虹』」.『ロレンス研究――「虹」――』：5-10.

鎌田明子.「『闘い』のゆくえ――ウィルとアナをめぐって――」.『ロレンス研究――「虹」』：71-102.

鈴木俊次.『キーワードで読むロレンス――「関係性」の視点から――』. 鷹書房弓プレス, 2007.

田部井世志子.「科学・機械文明を告発するLawrenceとJeffers」.『北九州市立大学文学部紀要』第81号. 2012：23-46.

---.（池田）.「『虹』における蛇のイメージ」.『アポストロス』No.9. アポストロス同人会, 1982：1-12.

---.「《ロレンスとバシュラール》〈物質的想像力〉を駆使した『プロシア士官』の読み」.『D.H.ロレンスと新理論』. 国書刊行会, 1993：51-69.

西村岩雄.「『虹』における肉の復活と虹の象徴」. 『ロレンス研究――「虹」――』：41-70.

ハーグリーヴス, ジョイス.『ドラゴン』（アルケミスト双書）. 斎藤静代訳. 創元社, 2006.

藤原満寿子.「『トマス・ハーディ研究』と『虹』」.『ロレンス研究――「虹」――』：189-228.

水野拓.『龍の伝説』. 株式会社光栄, 1996.

## 参考文献

eBook: *The Rainbow:* http://www.gutenberg.org/ebooks/28948
*Sons and Lovers:* http://www.gutenberg.org/ebooks/217
*The Trespasser:* http://www.gutenberg.org/ebooks/9498
*White Peacock:* http://www.gutenberg.org/ebooks/38561

「申命記」.『聖書』.

「雄略記」.『日本書記』.

「ヨハネの黙示録」.『聖書』.